

A-69

LES DAMES NOIRES



黑
衣
婦
人
全

特49

101



黑
衣
婦
人
全



緒言

天地剖判以來茲に六千年、然れども『婦人』の二字の世人の口に上る、今日の如く頻繁なるはなし、若し十九世紀にして他に多くの名を孕まずんば、吾人は必ず先づ之に『婦人の世紀』の名を呈せんと欲す、嗚呼婦人なる哉、婦人なる哉、今日は實に婦人崇拜の時代なり、夫れ現世紀は百事百物の上に前代未聞の進歩をなせりと云ふ、婦人問題に於ても亦古今未曾有の一大進歩をなせり、回顧すれを距今五十年前、婦人は男子の奴隸なりき、當時之に自由を授けんとせる議論は一大進歩の議論と目せられたり、然るに忽ち茲に一轉して男女同權の時代となりぬ(少くとも家族の中に於て)、忽ち又再轉して

女尊男卑の時代となりぬ（少くとも或邦國に於て）、今日に至りては婦人は實に一家の女王となりぬ（所謂曠天下なり）、一轉一轉又一轉、遂に夫れ此の如く一大長足の進歩をなせり、然れども進歩は茲に止まらず、蓋し進んで止まらざるは、進歩の原則なり、今日までは往々家庭内に於て進歩せり、今後は一躍社會に乗出し、男子と共に政權官位をも争はんとなす、何ぞ其勢の盛なるや、是に於て乎所謂女權論なるものは一の主義となり、其結論大に現社會の組織を改良して、將に別乾坤を闢かんとなす、然らば則ち婦人の將來は如何、有名なる喜劇は嘗て之を演出して曰く、辯護士も婦人、代議士も婦人、裁判官も婦人、知事も又婦人、而して其良人は閨門堅く鎖して、裁縫に従事し、主婦の食を調理し、兒女の養育を爲さんと、嗚呼亦奇觀なる哉。

我邦も亦幾分か此潮流に入りたることなしとせざれども、幸にして大和男兒は未だ其權利と位地とを婦人に讓托せず、勿論今日の男兒たるものは、婦人が時勢の寵兒となりて、現社會に優にやさしく言語動作するを欲せざる者はなけれども、是が爲に舊來の婦容婦徳所謂婉婉聽從の徳、艷麗温雅の姿、賢良優淑の品性等を失はんことを欲する者は一人もあらざるなり、婦人の政治上、外交上、商業上に於ける勢力、其の社會の風紀、國家の元氣に於ける影響等に至りては、今や人皆之を知る、余亦何をか言はん、然れども國の光榮亦茲に繫

れりと云ふ事は、余の特に言はんと欲する所なり、蓋し大和男兒の忠勇義烈と日本婦人の美點特質とは、朝日に匂ふ山櫻の如く、双美相映して永く東洋の榮譽となりたれをなり、是を以て賢良温雅の淑徳を養成すべき女子教育なるものは、今や實に一の重要なる社會問題となるに至れり、嗚呼此問題を解釋する者は誰ぞ、吾人は風教の爲め、家庭の爲め、社會の爲め、及び婦人其者の爲めに一日も早く其解釋者の出でんことを切望せざるべからず、又其人の誰たるに係らず、大に之を歓迎せざるべからず、蓋し其國家に貢獻する所實に偉大なれをなり。

明治三十年十二月

編者識

黒衣婦人

本篇は『サン、モール會の歴史』と『同會の創立者ニコラ、ハレ氏の傳記』と題する二書に就て編りたるものなり、前書は五年前、後書は三年前、世に公にせられたるものにして、**黒衣婦人の事跡**を載すること、頗る詳なり、編者今同婦人の真相を我邦人に知らしめんと欲するに當り、往々其事跡を右二書より譯出したり、編者は務めて事實を正直に語らんことを期したるが故に、敢て他意を挾まず、勿論多少考案と感慨とを挿入したる所なきにしもあらず、そは九牛の一毛のみ、讀者亦容易に之を識別するを得可し、編者の此編を草するや、幾分の勞苦なくんをあらず、然れども讀者諸君の愛顧を本篇の記事に垂るゝあらず、其勞を拭ひ得て餘あり。

(一)

黒衣婦人とは何ぞや、是れ世人が開口第一に尋問する所ならん、黒衣婦人一にサン、モール會の婦人とも稱す、同婦人は二十有餘年來日本に來り住すと雖、人之を知る者な

し、近く之を目撃したる人と雖、其真相を知る者は甚だ稀なり、今日まで人々の知れる所は、單だ彼等は一種奇怪の服裝をなすと云ふ事のみ、彼等は往々皆眞面目なる顔色をなすと云ふ事のみ、彼等は其家に在りて極めて嚴格なる生活を送りつゝ、ありと云ふ事のみ、一言以て之を蔽へ必、彼等は尋常の外國婦人とは丸で打つて變つて居る婦人なりと云ふ事のみ、人々の知る所實に此の如し、然れども其果して如何なる者ぞと云ふに至つては、四千餘萬の同胞中、之を知る者恐らくは一人もなからん、今詳に之を知らんと欲せむ、須らく先づ其歴史を讀まざる可からず、彼等は不思議にも一の長大なる歴史を有す、而かも其歴史は佛國二百五十年來の教育史と密接の關係あり、是を以て教育家は皆好んで此歴史を愛讀す、編者以爲らく、邦人も亦必ず之を愛讀するならん、何となれを同歴史を繙くときは、百年以來我日本國に行はれたる事跡と畧ば同一の事跡の處々方々に散見するを認むれをなり、是故に同歴史を讀むは、宛も我日本近世史を讀むが如き心地せらる。

(二一)

黒衣婦人會の初めて創設せられたるは、佛國の教育界が萎靡不振の絶頂に位したる時に在り、彼の佛英の戦争（一千三百三十七年より一千四百五十五年に至る）は、上下百有餘年の間、肉飛び血迸るの悲劇を演じて、大に佛國を荒し、其餘毒延いて同國の萬事に及ぼしたるが故に、學校教育の如きも亦是が爲に大なる打撃を蒙り、一敗地に委して殆ど再び立つ能はざるに至りぬ、戦後の餘弊尙は未だ掃ふに遑わらざるに、又々宗教騒亂なるもの起り、（一千五百六十二年より一千六百三十年に至る）、百冗煩亂、禍害鬱結、歐洲諸國は修羅の巷となり、而して佛國殊に其大害を蒙れり、今單に教育の點より之を觀るに、プロテスタン教の佛國に於ける影響は、國民教育の刷新を大に遲滞せしめたり、同國の子弟就中子女は多く皆無教育に放任せられ、彼の村落に至りては一層甚しく、村民の一般は殆ど無知無學の境界に沈み居たり、道義は紊亂し、弊風は百出し、悖徳汚行は日に月に熾になり、社會の狀態實に目も當てられざるに至りぬ、勿論學校教員なるものなきにしもあざりしかども、其數甚だ鮮少なるが上に、多くは皆金錢と相談の教員にして、唯だ利是れ計り、否らされを往々凡庸にして、才

もなく識もなく、徒らに員に備はると云ふのみにして、天下の青年子弟を教育するが如き大任聖職には堪へざる者のみなりき、是を以て心ある人々は、(世には幸に其人あり) 國家が斯る射利一偏の教員に大金を出して、單に読み書きのみを教へしむる不可を鳴らして曰く『書を読み字を書するが如きは、抑も末なり、國家有用の人物を作るには、此の如き事を以て足れりと爲す可からず云々』、有名なるブルドアーズ氏は語て曰く『國家有用の人物を教育せんには、使徒的に働く所の教員あらんを要す、彼の滔々たる射利的教員を雇ふが如きは、教員職を以て麵包パンを求むるが爲に發明せられたる一の商業と見做すにあらずして何ぞや』、此時に當りては、天下の志士皆高遠の教育を叫び、到る處に此事を談じ居たり、故に彼のハレ氏も又之に和して曰く『然り、靈魂の要求は肉身の要求よりも同情を表するに價するものなり、如何なる貧民の子弟と雖、之に道義を教ゆるは、其身體に衣食せしむるに優るや遠し』、蓋し當時の父兄たるものも、往々財産を以て其子弟を富すことのみを務めて、道徳上の教育を之に授くるを忽諸に附し去りたるが故に此言ありたるなり、由來此點に就ては天下の父兄の多く誤

る所、蓋し東西古今の通弊なりとす、今日に於ても、此の如き父兄は往々之あり、彼等は道徳の貨財よりも大切なるを看取するの明なし、若し夫れ徳育の必要に至つては、殆ど無感覺なるが如し、人に依りては故さら見ざる聞かざるの三猿主義を遵奉するものあり、豈慨して慄せざる可けんや、古語に曰く『黄金こがね白銀しろがねを山はど築くとも、道義の觀念なき人何かせむ』、然れども記せよ、此道義の觀念なるものは、全く教育に依りて與へらるゝものなるを、故に哲人は曰く『完善なる教育には、天下何物か如かん、人々をして一生の間其効果を樂ましむるものは、唯だ夫れ完善なる教育あるのみ』と、善ひ哉言や、世人の熟考を要する所。

(三)

然れども當時完善なる教育を授くる爲には、果して如何なる教員を要すべかりしや、男子を教育するが爲には男子、女子を教育するが爲には女子、然れども男女教員たるもの孰れも献身的の熱誠を懷き、青年子弟の教育と國家百年の公益の爲には、滿腔の血心を絞り、一身の利害を擲ちて茲に従事し、衣は以て身を掩ふに足るべく、食は以

て腹を肥すに足るべしとして其餘を貪らず、且一致は力を倍屣するものなるが故に、出來得る丈け共同の生活を爲し、同一の規則に服し、如何なる處に遣はさるゝも、始終一貫の精神に鼓吹せられ、到る處天地に愧ぢざる言動を示し、而かも言語ことばよりは寧ろ行爲おこなひを以て人を導き、因て以て其教ゆる所に効力威權あらしむる所の眞誠の人物を要すべかりしなり、然れども當時の教員に就て、此の如き献身的事業を要求するは、言ふ可くして行ふ可からざる理想なりき、彼等は此の如き事を夢寐ゆめにだも想像せざりしなり、蓋し絶體的不能の一事と思ひたり、然るに不思議なる哉天は此理想を或地に實行せしめたり、即ち彼の人類の大恩人ウァンサン、ド、ポールなる者は、此時有名なる『女子慈善會』を創立したり、同會の婦人は身に一錢の貯もなく、心に一物の望もなく、生命を犠牲に供し、死生を天運に任せ、堅忍不拔の氣象を帯びて、千難萬艱を排し、男子に耻ぢざる勇氣を鼓して、百千ひゃちの危険を冒し、如何なる流行病の中にも入りて看護の勞を執り、硝煙彈雨の地にも進んで其義務を竭し、其勇や凛として實に當る可からず、其操や屹として眞に犯す可からざる慨ありき、夫れ堂々たる男兒にして之あるも

尙ほ感すべし、況や纖弱なる女子に於て之を見るは、一層感すべきなり、我邦に於ても亦此の如き忠勇義烈の例なくんをわらず、往年日清戦争の際に於ける婦人の義氣、就中赤十字社の看護婦の忠勤を見む、蓋し思ひ半心に過ぎん、語に曰く『忠勇義烈なる國民に於ては、德行上不能の事は一も之なし』耳に快なる言と謂ふ可し、然り而して同一の理想は女子教育の點に於ても、偉大なる人物を以て實行せらるゝに及びぬ、偉大なる人物とは誰ぞ、ニコラ、バレ氏即ち其人なり、氏は一千六百二十一年十月二十一日佛國のアミアンに生れ、同國の盛時に當り、能辯家として、哲學者として、名聲噴々たる者なりき、當時を指して盛時と稱するは、頗る奇怪なるが如くなれども、實際同國には一般の人民に在りては、其知識の程度低うして、殆ど無知無學の境界に沈み居たれども、退て一部人士の社會を見れむ、知能發開、文物隆盛にして、學術技藝等燦然たる御宇を作りたり、是れ亦歴史上奇として見る可きなり、氏は則ち此時に當りて嶄然頭角を顯はしぬ、氏の光榮とせる所は、一方には人類の一大恩人たらんを欲し、一方には國民の眞誠なる友たらんことを欲するに在りき、其志や大なりと謂ふ可し、氏

は其志業を實施せんが爲に、先づ天下有志の婦人を募りて、之に自心の耿々たる赤誠を吹込みたり、初めて其募に應じたる者は、ホンフルール村民の女ヂェウール、フランソアーズと稱するものにてありき、幾許ならずして、三人の婦人に加はりたり、孰れも世には名なく道なく又金なきもの、唯だ其志や嘉す可く其勇や感ず可かりしのみ、然れども徳孤ならず、必ず隣ありと云ふ、乍にして他の一方より富貴の人、仁腸の人に於て金を擲ら、力を添へて、氏の義舉に賛成する者、陸續踵を接して起るに至れり、今茲に一々是等志士仁人の名を列擧するを得ざれども、其中最も有名なるもの一人を擧ぐれむ、マダム、ド、マエフェールと稱する貴婦人は是なり、同婦人は一千六百二十三年佛國のレンヌに生れたるもの、其夫はルアンの會計局長たりき、婦人は巨萬の資産家にして、初め其驕奢の爲め、其贅澤の爲め、其名全市の人々の口に上れり、日々高金の衣裳を重ね、好んで珍奇の服装を爲し、尙己の氣に入る儘に化粧を凝さんが爲め、我身に像りたる木製の模範人像を化粧室に置きて、衣裳を着る前必ず先づ此模範人像に着せて、其風姿の善惡を見たりと云ふ、然るに一旦豁然として其擧措の馬鹿々々しき

を曉りたるとき、翻然茲に志を飄して、忽ち天真爛熳たる風采に變じ、爾來は一に質素を旨として、苟にも誇りがまじき風体を爲さず、身を終ふるまで慈善の業に従事し、昔時已が服粧の爲に費したる金は、爾來は一切之を慈善の爲に擲つに至りけりとぞ、ハレ氏の美舉は、此の如き人の義捐と助力とを得て、着々進運の緒に就きたり、第一の學校は一千六百六十二年ルアンの隣村ソットウィールと稱する地に設けられぬ、同年二棟の學校其近傍に開かる、數年を出でずして又々四棟の學校ルアンに開設せられ、無月謝を以て子女を教育したり、一千六百七十年に當り、レンヌにも又一の學校創立せられ、到る處に成功して、効果は教員等の熱心に應じ、事實は殆ど其豫想の外にも出でたり、是に於て乎初め不能の一事と見做されたる理想も、遂に現實となるに至りぬ、精神一到何事か成らざらんと云ふ、我是に於て乎之を見る。

(四)

ハレ氏は如何なる困難に遭遇したるや、凡そ新事業の起る毎に、必ず之に反對運動を試むるものあるは、自然の勢なり、氏が其業を企つるに當つても亦然り、反對論者紛

然として起り、内外周邊より百の障害を加へたり、然れども是等の障害は氏の企業をして益々鞏固ならしめ、確立一定萬古不動の地盤に立つの基を開かしめたり、實を云へむ、當時の人民は氏の企業に反對すべき理由なかりしなり、數人の婦人が相集まつて女子教育に従事し、是が爲には一物をも他人に仰がざるの精神なりしとせむ、寧ろ之に賛同を表して、其精神を奨励すべかりし筈なり、何事ぞ之に反對して妨害を加へんや、然れども人事は獨り正而より解釋すべからず、當時之に激烈なる反抗運動を試みたるもの他に理由ありたり、蓋し人は道理に制せらるゝよりは、寧ろ感情に制せらるゝを常とす、感情に制せるゝ人は、己れ善ならざるときは、容易に人の善を善とする能はざるものなり、然れども善を善とせざるは、理に於て許さず、是に於て乎種々様々の口實を設けて、務めて其善事を掩はんとするものなり、古來人の善事に反對する者往々皆茲に出づ、當時の反對論者も亦然り、而して其口實に曰く『彼の女教員等己に一物の貯なく、人にも亦一物の施を仰がずとせむ、何を以て生活するを得るや』、又曰く『結婚せずして獨身の生涯を送り、修院に鎖ざされずして、俗人と相交るべき婦人には、

如何にして信任を置くを得んや、彼等先づ果して永く其天職に繼續するの氣力あるや否や』、又曰く『今日まで婦人にして此の如き生活を送りたる者なきにしもあらず、然れども其多くは皆閨門深く閉ぢて外出せず、終日終夜嚴格なる規則に服して、修院的の生活を送りたるものゝみ、外出の自由ありて事に茲に従はんとする者は、此等の婦人が嚆矢なり』、又曰く『青春妙齡の女性にして、出で、他の女性を教へ、或は兒童を育て、時としては男子にも交り、而かも人の私室までに立入る等の事ありとは、豈可笑からずや、否悪しき標本にはあらずや云々』、然れども彼等女教員等は、毫も是等の世評罵詈に耳を傾けず、自ら警戒しつゝも、益々其熱誠を倍して事に茲に従ひたり、其創立者バレ氏も亦是等の世評を利用して、益々學校の信用を博する基となし、其益なる所は自ら取つて之を收め、其惡なる所は人の言ふが儘に打任せたり、蓋し氏は自ら信すること篤く、人を見ること明なる者なりしかむ、我が將來爲す可き所を堅く取つて動かす、女教員等の心を知つて深く之に任じたり、果せる哉氏は一千六百六十年に當り、其大計長策を女教員に打明し、自今以後一の會を組織して、會員均しく同一の

規律に服すべきことを決定したり、夫迄氏は是等の女教員を自由に任せ置き、新たに組織せらるゝ會に入るの勇あるや否やを試さんとせり、同會設立の時には之に約して曰く『多く働き、多く忍び、若し事に堪へざるに至らむ、貧民と共に病院に入りて死を待たんのみ』、然るに勇猛なる女教員等は喜んで此言に服し、創立者の命ずる所は、如何なる事と雖、之に従はんことを誓ひたり、然れどもバレ氏は彼等が數年來行ひ來れる所のみを命じて、他に要求する所なかりき、外形上に於ては敢て著しき改變を行はず、其服装は當時の重々しき婦人のと異なることなく、黒き長衣、黒き頭被、及び黒き面帽なりき、黒衣婦人の稱此より出で、今日に至るも人皆斯く稱す、蓋し其服装當初のと同小異なれむなり、今日世人が之を見て奇怪に思ふは、世は年々流行を追ふて推し移り、爾來婦人の服装は、百回も變り來れるが爲ならん、然れども斯く新を競ひ奇を好むの流行も、亦再び舊に復して、古への重々しき服装に立戻るやも測り難し、既に斯の如く會規の制定したる以上は、女教員等所謂黒衣婦人等は、尙一層熱信の度を増進したり、然れども漫に世人の注目を惹かんことを避けて、成る可く寂然懔な

くして子女の教育に従事したりしが、幾許ならずして大に父兄の信任を得、尋で又高位高官の信用をも博するに至りしかを、其名忽ち世に響き、同會の生徒は極めて謹慎にして又極めて才學ありと云ふ評判公然世人の口に上りぬ、是より生徒の數日に月に加はり、其朋友の慨嘆あるにも拘らず、其反對者の攻撃あるにも係らず、眞理は終に最後の勝利を占むるに至れり、レンヌに於ては未だ五年を経ずして、一千有餘の生徒入り來りければ、校舎頗に狹隘を感じ、室を四級に區劃せるも、尙之を入るゝに足らざりきと云ふ。

(五)

然れども是れ唯だ創業の端緒のみ、ルアン、レンヌ等の地方に創設せられたるものは、宛も遠隔の地に假植したる樹木の如き觀あり、其生育するを待つて、之を他の主要の地に移植すべきものにてありき、主要の地とは即ち是れ國の首府を云ふ、今左に同會の如何にして國の首府に移植せられたるかを記さん。

一千六百七十五年に當り、同會の創立者バレ氏は哲學を教へんが爲に巴里府に召さ

る、其時の時代は佛國の歴史上一大世紀と稱して、最も文物隆盛の時にてありたり、雄辯家、歴史家、詩人、法律學者、財政學者、軍人、文學者、美術家、科學者、慈善家、道德者、及び聖人に至るまで、凡て國家の榮となり、人民の譽となる者は皆相集つて大王ルイ十四世の周邊に在りたるを以て、此時代は實に同國歴史の誇稱する如く、碩學鴻儒、名僧知識等の皆輩殺の下に相集りたる時代にてありき、然れども一都城が斯く文華の中心、學術の淵藪となり居たるにも係らず、借眼を轉じて、國內一般の状態如何と云ふに、上文にも記したる如く、人民の多數は皆暗愚に沈み、殆ど無學文盲の境に至りては、全く無知無學の境界に彷徨したり、學校の數は首府にも缺乏を告げ、其上現在の學校には熱誠忠勤にして能く任に堪へたる教員極めて尠かりき、此際に當り同會は地方に於て着々成功して、日に月に好結果を奏するに至りければ、此事忽ち首府巴里に聞ゆるに及びぬ、時に巴里の人々多く議して曰く、試に同會の婦人を首府に呼びて、成否如何を檢せんと、然るに巴里にも又々反對論者起りて、直に此議を排撃し、彼の

ルアンの反對論者と略は同一の詰問否口實を以て太く之を非難したり、唯だ其異なりたる所は、左の詰問にてありき、曰く『地方出身の者が、國の首府に於て、何事をか成し得べき』、又曰く『男子にても困難を感じる事業なるに、貧弱なる女子の争で之を企つることの得べき』、或は又曰く『黒衣せる婦人が片田舎より上りて、堂々たる國の都府に來らむ、定めし珍奇異様の觀を呈せん』、嗚呼口實も亦窮せりと謂ふ可し、嘲笑罵詈一も取る可きものなし、才學あるバレ氏の如く、雄辨なるバレ氏の如き者に取りては、固より齒牙に懸く可きものにあらず、殊にバレ氏は如何なる困難にも感ぜざる性質なりしかむ、螻蛄斧を怒らして車轍に當るが如き事には、尙更痛痒を感ずべき理なし、然れども氏は實行を以て見事に是等の難問を打破つて見せんとこの精神なりしかむ、故さら反對論者をして其言ふがまに、打任せて、自らは空吹く風と聞き流し、宛も爾は爾たり我は我たりと云ふ主義を取る者の如く、直前勇往、已は唯だ己が行くべき道をのみ辿り行きたり、然れども眞理はイツモ最後の勝利者、氏は亦首府に於ても立派に成功するに至れり、善を善とする人何れの處にか之なからん、巴里にも亦其人ありき、マ

リ、ド、ローレスと稱せる者はなり、有名なるギーズ侯の御息女にして、同家最終の後嗣にてありき、此時は既に嫁して餘程高齡に達せられけるが、不幸にして子なく、巨萬の資産誰に譲らんと云ふ事もなければ、一向慈善の業に従事せられ、御自身は奢侈もなく、贅澤もなく、最と質素なる生活を送られけり、此人ハレ氏と謀りて巴里府サン、ジャン、アン、グレウと稱せる市區に一の學校を設けられんことを計畫せられけるが、初めのうちは種々様々の困難ありて、幾と一年の日子を準備の爲に費されたり、一千六百七十六年愈々其望を達せられて、茲に開校の祝典を舉行せられぬ、是より日に月に其好結果を見そなはれければ、大に御満足に思召されて、翌年又々四個の學校を御領地に設けられ、領内の人民を同校に教育せせんが爲め、教員の俸給等一切御自身が擔當せられたり、其後四年を経て、同府六區の民も相共に學校の設立を請願せしかむ、事皆豫想外に出で、成功成功又成功、最初の困難は何れへか消へ去りて、今は一瀉千里の勢、女教員等所謂黒衣婦人等も此勢に乗じて、一層赤心を吐き、熱信を燃して、鞠躬勉勵しけるに、有志の婦人は日一日に加はり、名門右族よりも贊成者踵を接

して起り、相共に其業を助け、其勞を分かつたんと欲しければ、反對論者は何れも皆背後に墮若たりき、是に於て乎ハレ氏は遂に實際に於て大勝利を獲たり、然れども氏は遠大の志を抱きければ、尙一層其規模を擴張せんが爲め、殊には新人の志願者も多かりければ、是等をも薰陶せんが爲めに、サン、モールと稱する市街に一の邸宅を買受けて、同所に志願者を置き、且之を會の中心と定めたるより、常に同會の事を稱してサン、モール會と云ふに及びたるなり、此稱永く傳はりて、今日にても亦斯く稱す、隨て同會の女教員即ち俗に謂ふ黒衣婦人にも、其稱自然に移りて遂に之をサン、モール會の婦人とも稱するに至りぬ、此稱最も普通にして、多くの人々皆斯く稱するが故に、今は殆ど一般の通稱となりたり、然れどもハレ氏は尙其事業を完うせんが爲に、子女の將來をも考へ、同會の學校より出づる青春妙齡の女性を、世の濁流より救はんどの精神を以て、茲に實業學校なるものを設立せられたり、同校には是等妙齡の子女に専ら實業教育を授けて、後日有用の妻たらしめ、善良の母たらしめんことを期せり、同校に於て教育を受くる間は、日々生徒に業務を執らしめ、其收入結果を以て、自活の

出来る道を備へたり、嗚呼亦至れり盡せりと謂し。

經る八年にして、同會は巴里全都の信用を博し、貴族も賛成を表し、權門も眷顧を垂れ、天下有力の士も力を添へ、社會樞要の地に立てる者も資を投じ、一言せむ、同會の美舉と成功とを見て、仁腸義俠の人々は皆自ら進んで之に替同を表するに至りぬ、故に同會に取りては此上なき面目にして、最早何不足なきに及びたれども、上を見れば涯限のなきもの、茲に尙一の遺憾とす可き事ありたり、此は當時の人々の皆競ふて求めんことを欲したる所なれども、九重雲深ふして容易には之を求むるを得べからざりき、開は又何ぞや、王室の保護即是なり、然れどもハレ氏は敢て茲に意なかりければ、之を求むるが爲に、何等の手續をもなさざりき、蓋し氏の意は同會を會員の德行と其成功の上に築くに在りて、其他の人間的手段に依頼する心は毛頭之なかりければなり。

(四)

然るに王室の保護は、之を求むるに意なくして、自ら落ち來れり、徳の存する所、功の顯はる、所には、名聲自ら來るものなり、同會の王室の保護に於ける亦此の如し、故

さら進んで之を求むるの手續は取らず、然れども其赫々たる徳功は自ら之が轉達者となりたるなり、蓋し同會の創立者ハレ氏は巴里の學者社會と日に交通せる者、固より其名永く世に知られざる筈なし、幾許ならずして其徳名畏き邊まで達したり、此時王廷に一人の寵姫ありたり、至尊の御覺斜ならずして、其寵愛、其信任日に月に加はり、前後御崩去の後は上げられて終に正妃とならるゝに及べり、同妃は歴史上にて之をマダム、ド、メントノンと稱し奉り、頗る有名の御方なり、初め新教の教育を受け、後に公教に歸順られ、御幼少の時の先入習慣等を打克つに、餘程御辛勞遊されたるを以て、幼時の教育の必要なる事は、夙に御承知あらせられたり、去れを出來得る丈け力を盡して、昔時同教の友を助けさせんが爲め、新教より公教に歸順りたる幾多の子女を集めて、之に眞誠の教育を授けさせんと思召されぬ、是が爲に王が嘗てウエルサイユ宮廷を擴張の爲め買求めしめたるノアージュと稱せる別荘を貰ひ受け、此處に一の學校を設けさせられて、ハレ氏の女教員所謂黒衣婦人の一人なるマダム、ド、サンパールと稱する方に同校を寄托せられたり、此方は貴族の女にして、新たにサン、モール會に加入

せられ、此時は既に會員にてありき、同會が其名聲を世に轟かして、純然たる一の歴史を有するに至りたるは、全く此時に濫觴^{はじま}れり、時の王もメントノン后に開召されて、同會の目的及其組織をも最と綿密に探知せられたり、同王は國の利害と民の休戚とを日夜宸襟に懸けさせられければ、世間に斯くまで評判する同會の女教員所謂黒衣婦人を利用して、佛蘭西の南部就中新教徒の多く住せる土地に於て、教育を施さしめんと欲を起させられたり、因てバレ氏に黒衣婦人七名を請ふて、先づ試に之をツッルーズ及びモントパンに遣はされぬ、(一千六百八十五年)、費用は一切王室費を以て支辨せしめられたり、同地にては官民共に王の聖旨より出でたる事とあれど、何事に限らず尊敬を以て之を奉體したりしが故に、今此黒衣婦人の王命に依りて來れるを見たる時も、亦皆敬禮を施して之を優遇したり、當時の記録は其時の事を吾人に知らしめて曰く『此時顯官は禮服を着して、門外まで出で、之を奉迎したり云々』、時の知事は王命を奉じて、配下に令して曰く『縣下の民は今下向せる女教員に、凡て必要なるものを供せよ』、去れを其學校にも王室の二字を冠して、『エコール、ロアイアール』と稱し、其教

員にも巴里の二字を冠して、『ダム、パリジエヌ』と稱したり、然れども黒衣婦人の名は當初より一般の通稱となり來れるを以て、尙多く此名を稱したり、王は此時の成功豫想外に出でたるを見そなはし、其後二年を経て(一千六百八十七年)、尙他に十二人の黒衣婦人を遣はされけるが、此時も二年前と同一の神遇を以て、最と鄭重に請せられたり、世に名高きニーム及びビツムルの學校は實に此時に開始^{はじま}れり。

(七)

彼のサン、シールの學校も亦名聲噴々たるもの、固より之を没す可きにあらず、同校は一千六百八十六年八月一日を以て開校の盛典を行ひたり、佛王ルイ十四世は疾くよりサン、シール(ウエルサイユ)を距る凡そ二里餘に華族女學校を設け、王室費を以て二百五十人の淑女令嬢を教誨せしめんとすの思召にてありぬ、王の聖慮は實に此を以て華族の淑女令嬢に有要の教育を授けしむる而已ならず、實は同校を以て國內一般の學校の師範たらしめんとするに在りたり、故に此點に於ては巨多の費用と慎重の用意とを費されたり、建築は一千六百八十五年四月二十五日を以て初め、一年三ヶ月を以て工

を竣む、費す所實に百四十萬「リール」、即ち今日の三百萬「フラン」に相當す、其規模の宏大なりしこと推して知る可きなり、教員は總てノアジー校(前章に記載せり)より招くことに決し、同校の中にも最も年齢才學に長じたる生徒を撰びたる積なりしかども、何分にも生徒の中より撰抜したることなれむ、學問の點に於ては兎も角も、尙未だ年若けれむ、容ば已と同年の生徒を管理するには力足らざりき、是を以て止むを得ず、年長の教員中より最も經驗に富み、最も教育に長けたる者を召し、生徒を眞面目に教誨すると同時に、未來の教員(ノアジーより來れる教員を云ふ)をも仕立てしめんとせり、然れども此大任に當るは容易の事にあらざりき、蓋し之が教員たる者は管に才學と經驗あるのみにては足らず、宜しく先づ第一には一大謙遜の徳なかる可からざりき、何となれむ校主及び校長の次席に立つを甘んせざる可からざりければなり、第二には巧妙なる手加減を要したりき、何となれむ校主及び校長の感情を書ひ若くは其嫉妬を招くの憂なしとせざりければなり、此の如く慎重なる用意を要する所なりしが故に、王は先づ備さにパレ氏と謀り、黒衣婦人の中より適任の教員十二人を撰びて、

ン、シール校の未來の教員を補翼しつゝ、之に教授の方法を授けしめ、尙之と同時に同教員と生徒とを、同校の組織と規則とに依つて、養成薰陶せしめんと決定せられたり、一千六百八十六年九月を以て、王は初めてサン、シールの學校に臨御せらる、同校の記録は此時の状況を記すること詳なり、請ふ左に之を譯載せん、

『教員(黒衣婦人)は皆面帽を被り、合羽を穿ち、手に點火の燭燭を持ち、順次に並立して、除々と行列をなしつゝ、修院の門外まで出で、陛下を奉迎しぬ、院内の長さ廊下より聖堂に至るまでの途中には、同衣同服を着せる生徒、級に依りて二列に分れ、默然として謹慎を示し、肅然として敬畏を表せしが、陛下の廊下御通行の際に當りて、異口同音に『テデオム』と云ふ讚美歌を歌ひつゝ、聖堂まで扈從し奉りぬ、堂に入りてより陛下は祈禱臺に就かせらる、此時『テデオム』の歌畢り、尋で『ドミニ、サルウサム、ファク、レーゼム』と云ふ國君の榮福を祈る歌を謠ひぬ、右畢りて陛下御出堂の時、生徒一同教員の指揮に従ひて、陛下の前に立並び、御通行の際師弟諸共に深く之に敬禮を施しぬ、其後陛下は教員室に御入來あり、教員一同

を著座せしめたる後、親しく教員の義務につき御物語あらせられて、曰く、
 「教員の事たるや、困難中の又困難なるものなり、何となれを如何なる苦業難行に
 ても、間斷休止のなきものはあらざるに、兒童の教育のみに至りては、造次顛沛
 にも茲に従事して、一生を犠牲に供せざる可からざれむなり。」

畏れ多くも陛下は御自身の口を以て、此の如き御言葉を下されたるが故に、教員等一
 同は天に歡び地に喜びて、是よりは一層勇氣を鼓し、一層熱誠を凝しぬ。」

熟らサン、シール校の教育を視るに、蓋し當時に在つては最も完備したるものにてあり
 き、此時既に讀書、習字、文法、算術、歴史、地理等の課目を立て、教へたり、而し
 て其教育たるや頗る鞏固にして且つ専ら實用を旨とせりと云ふ、若し夫れ工藝等に至
 つては、下は洒掃應對の末技より、上は裁縫縫箔の妙工に至るまで、最と懇に教授し
 たり、然れども其中尤も注目すべきは、生徒の品致を養成する點に在れり、其品行を
 方正ならしめ、其嗜好を高尙ならしめ、其禮節を鄭重ならしめ、其言語を優美ならし
 め、又其舉止を閑雅ならしむる等に至つてや、最も力を込めて教誨を垂れたり云ふ、

蓋し此時代は佛國王廷の徳風靡然として民艸たみぐさの上に加はりたる時にてありぬ、同國が
 交際社會の禮讓を重んじたること歐洲第一と稱せられたるは此時なり、文學上千古の
 傑作を出したるも此時なり、佛語が外交上の通語となりたるも又此時にて在りぬ、有名
 なる詩人ラシヌは其名吟『エステル』の序文に於て、當時サン、シール校の淑女令
 嬢方は、如何にして其品質嗜好を養成せられたるかを記して、曰く、

『此青春妙齡の子女には、主要必須の學問を教ふると同時に、其氣品を磨き、其判斷
 力を養ふ道を授くる事をも忽諸に附せざりき、是が爲には種々工夫を凝らし、成
 る可く生徒に日々の課業練習を缺かしめず、亦成る可く面白味を附して之を學べし
 むる方法を案出せり、是故に先づ生徒をして重大なる義務等に就き、相互に鋭敏なる
 言論を戦はしむる法を立てたり、此時の言論は故さら教員が是が爲に作りて授けら
 ることもあり、又は生徒をして直にまは即坐まはに作らしめたることもありき、此法は歴史上
 の事跡を讀み聞かせたる時杯にも應用せしめ、主要の眞理を教へ授けたる時杯にも
 應用せしめたり、其外有名なる詩人の名吟佳什を抜き之を暗誦せしめ、若くは之

を咏吟せしめ、斯くして地方より持來れる惡しき發音を矯正たごなほさしめられたる、此事大に其功を奏したり、音聲ある者には又歌の稽古をなさしむる等、一技一能の末に至るまで、最と面白く之を利用せしめずと云ふ事はなかりき云々。』

サン、モール會の學校には、今日に至りても尙此方法に従つて教ゆ、蓋し『能く語る』と云ふ事は亦是れ一の美術なれどなり、而して之を學ぶには他に道なし、語る事を反覆練習するに在るのみ、サン、シール校は疾に茲に見るあり、名家の傑作を取て以て之を反覆練習せしめたり、マダム、ド、メントノンは此事に就き記して云へらく、

『此遊藝は記憶を養ひ、心を高尚にし、精神を善美にす云々。』

后一日ラシヌに語り、何か道德上の面白き事柄に就き、詩の類のものを作り、之を演劇に上のぼせて、歌誦の間に風教を垂る、趣向はなきやと仰せられければ、ラシヌは直に旨むねを承けて、サン、シール校の爲に有名なる詩『エステール』を作れり、此詩同校の淑女に能く暗誦せしめたる後、一千六百八十九年正月六日(水曜日)午後二時を期して、初めて演劇に上せたり、此時の観客は何れも皆雲上の人々のみにて、國王を始め、太子、コ

ンデの宮みや及び其他少數のやんどなき方々にてありき、王は此時同校の教員所謂黒衣婦人にも縦覽を許されたり、役者となりしは今迄の淑女達なれど、少しく恐れ恥づるの氣味ありしかども、兎に角謹慎と閑雅の容姿を示して、巧に其藝を演じければ、ラシヌも之を觀て大に悦びたりと云ふ、此時貴顯紳士、有位有識の人物に至るまで、深く王の聖旨みかひねに慚かたはんことを欲し、皆此演劇の席に列するを以て、此上なき榮譽となせり、劇は一週間に二回若くは三回行はれぬ、其度毎に王を始めとし許多の観客ありたれども、何れも皆勅選せられたる人物のみにて、尋常なつかの人々は中々此席に列することは許されざりき、観客の中には彼の太子の大傅として、佛國文學界の王として、教會演壇の雄將として、顯名を天下に轟かしたるボッセエ氏もありたれど、又ルイ十四世の聽悔司祭として著名なるドラシエーズ氏もあり、又彼の王の説教者にして、説教者の王とまで字されたる辯壇一方の大家ブルマルー氏もありたり、一千六百八十九年二月五日には、英國の王ジャック二世も皇后と共に來りて、此席に列せられぬ、事茲に至りては、益々國の面目ともなりたることなれど、王は又々ラシヌを召し、同じく風教に關

し、尙一の詩を作らんことを命せられたり、此時ラシヌは佛國劇界第一の傑作と稱せらるゝ『アタリー』を物したり、同作は文學上より觀るも、天下有數の名著にして、佛國文學社界には千古の文範として珍重せらる、蓋し完全無缺一點の瑕瑾なきに近し、然れども人事は不如意、惜い哉之を劇に上せて、大方の喝采を博するを得ざりき、ラシヌは之を以て終焉の遺憾となしたりと云ふ、蓋し此時劇場漸く亂れ、觀客多くは非理の望を抱て來り、演者亦當初の態度を失ふに至り、是が爲めサン、シール校の秩序をも亂し、同校生徒の氣品をも損するに及びけられ、演劇を斷然廢止するまでには至らざりしかども、今迄の如く盛大なる仕掛を以て行ふを禁じ、服裝も亦サン、シール校の衣服にあらざれを許さるることゝなりぬ、ラシヌの傑作も此非運に際し、曷ぞ成効するを得んや、爾來同校にては堅く其門を鎖ざして、一切外來の觀客を謝絶し、生徒をして皆身を潜めて寂然校内に働かしむることゝなしぬ、夫れ劇を演ずるは、一の藝なれを、固より之を罪すべき理はあらざれども、是が爲に學校の面目を損じ、生徒の風紀を亂す等の事ありては、勢ひ彼を捨て、此を重せざる可からざるなり、是れ亦人間の弱點、二

者兼有して樂むを得ざりしは、返すくも惜むべかりし。

(八)

サン、シール校内の事に就きては、ブルターギユの一婦人ルイーズ、ド、ブノンジャンは、最と詳に之を記したり、婦人は同校に滞在すること三週間、萬事に眼を注ぎたる後、執筆したりと云へど、其記事は益々以て信するに足るなり、今其概畧を左に記さん、

『我の此校に來るや、同校の生徒は青春妙齡の花盛りの事なれを、女性の常として定めて美服盛裝をや凝し給はんと思ひしに、事は全く豫想の外に出でぬ、生徒達は無論身もち奇麗にいさぎよく、風姿なよやかにして形やさしく、服裝もあでやかにしてうつくしく、總じて凡ての外形皆よろしく、足の運びも除かに、躰の持ちかたもしどやかに、敬禮の施しぶりも恭しく、先づはなべての婦容備はれりと云ふより外はなけれども、其が中にも最も注目すべき事は、何事に於ても質素を旨とせる事なりき、強ち飾をはでやかにせず、天然に背きてつくることもなく、又故さらに人の氣に入らんことを志すさまも見ぬす、…斯るよき風采の淑女令嬢を見る人々は、其

心に如何をかり善き觀念を起すや、知らず欲しく描かま欲しき事にこそ、況してや其群を成し列を揃へて教場に入り、若くは校外に出づる状態杯を見るに於てをや、此淑女達は何處に到るも個々別々に分るゝことなく、始終一群となりて往き、列をくづさず、口をさかず、一步も組を離れず、運歩を移して除々と歩み行くの状、何から何まで温雅優麗ならざるはなし、是等外部の事も固より其教育の結果とは申しながら、抑も未だ其末技のみ、蓋し其教育の完全なるは世に比類稀なりき、凡そ女性の學ぶべく知るべき事柄は何ひとつとして教へざるはなく、家政に就ても必要なる業は悉く之を心得しめ、衣服に至りても自ら手を下して之を仕立しめ、細ぐこと、裁つこと、縫ふことに至るまで皆自らせしめざるはなし、自ら其肌衣を作らしめ、自ら其靴下を編ましめ、其帽子其模様等に至るまで悉く自ら作り自ら撰ぶやうに爲さしめたり、斯の如く成る可く生徒に他人の手を煩さざる風習をつけ、れを、費用も随つて省け、依頼心も自ら薄ぎ、眞に獨立不羈の生活とはなりぬ、…(記者は夫より文學上の教授を最と詳に記したる後、語を繼けて云へらく)さるにても之を教ふるに

注意に注意を加へて、決して人の前に學者らしく見らるゝ心のなきやう説き聞かしむ、…道德上の教育に至つては、感心の外なし、此點に就ては『完全』の語を呈すも不可なきが如し、…それに禮儀の事柄も最と懇篤に教へ、夫に對しては如何すべきや、小供に對しては如何すべきや、下女下男に對しては如何すべきや、朋友に交るときは如何、隣人と語るときは如何、大工に對し、職人に對し、小作人等に對しては如何になすべきや、長者に對し、幼者に對し、富者に對し、貧者に對し、疎遠の人、不信實の人、仇人等に對して如何なすべきや杯と云ふ事に至るまで、皆一定の法に依て最と親切に之を教へたり、畢竟生徒の精神をも能く指導し、其心をも亦能く收攬するを得たりと謂ふ可し、教ふる者は敢て手に教鞭を執らず、顔に威嚴を示さず、口にも亦教員らしき語調を發せざりけれを、生徒とは宛も朋友の如くして、其起居を同ふするを樂みとなし、其間に於ても其答に於ても相互に恭敬謙讓を表はすを以て榮としぬ云々。』

嗚呼是れ實に女子教育の理想と謂ひつ可し、余は單に其主要の所のみを引證したるに

過ぎざれども、他は皆推して知る可きなり、右等の言に就て之を觀るに、蓋し女子に必要なる學藝は、其性に依り、其年に應じて、面白く且つ眞面目に之を教へたりと謂ふ可きなり、女子教育に従事する者誰か此の如くなすを欲せざらんや、教育者の日夜に夢想する所は實に此に在るなり、今や夢想にあらずして實際に於て施行せられたること此の如し、宜なる哉佛王ルイ十四世が其成功を見て太く満足を表せられたるや。

(九)

サン、シール校は實に此の如き土臺の上に建設せられ、其授業法、教育法等皆黒衣婦人より傳授せられて、拳々之を服膺しければ、幾許ならずして好結果を奏するに至れり、經驗は日に月に積み累なり、學徳は年と共に盛大に赴きければ、其名忽ち全國に響くに至れり、既に道は此の如く開け、れを、今は單だ當初の精神と其教傳とを導奉しつゝ、辿り行くのみにても、百事皆歲月と共に整頓するに及びぬ、蓋し創業の時期は八年にして全く其終を告げ、今は早や守成の時期となりて、教授の方法等畧は完備しければ、黒衣婦人は茲に引渡を爲さんとて、後任を新教員に托し、生徒に訣別を告げて同校を

立去りたり、新教員と云ひ、生徒と云ふも皆是れ年頃日頃我が薰陶誘掖したる人々のみなれを、師弟の關係は一層深く濶かにして、去る者も止る者も諸共に別を惜みて涙に咽び合へりと云ふ、殊に校主マダム、ド、メントノム后は一入名残りを惜ませけるとぞ、ルイ十四世も黒衣婦人の今迄の勞に報ひんが爲め、此時よりして五千「リール」今日の一萬五千フランに當るの金額を年々サン、モール會に棄捨せらるゝこととなりたり、史家の言に據るときは、黒衣婦人の同校を退くや、昔時同校に入りし時の如く、謙遜柔和の心を以て立去りたりと云ふ、爾來は會の命に依り、各自其遣はされたる所に往き、其眞率なること、其質朴なること十年一日の如くなりき、然れども永くサン、シール校に在りて、社會に對しても大なる功勞ありければ、同校を退て後も、大に會の名聲を博したり、是故に人々多く之に請ふて、首府巴里及び其他の地方に於ても、サン、シール校の如き學校を設立して、貴顯の子女を教育せられんことを願ひたり、然れども他にサン、シール校の如きものを創立するは、容易の業にあらざりき、但同會に於て同校の如き教育を授くるは、さまで六ヶ敷からざりき、去れを此時幾多の地方に

於て、格別佛蘭西の南に當りて、既に存立せる同會の學校の側に、特に上流社會の爲として寄宿舎を設け、此處に於て淑女令嬢達を教育することとせり、此寄宿舎は後日同會の繁榮の源となりて、其貢獻する所鮮少からざりき、何となれを此處に教育を受けたる者は、多くは皆義俠仁腸の人々のみなりしかを、自らも亦進んで教育事業の爲に資力を盡したれをなり、今是等の人々の姓名を一々擧ぐるの違なれども、其中にド、ボスルドン、ド、シローズ、ド、マルチンメニー、ド、ポーリュ、ド、リギイ等の方々は没すべきにあらざれを、殊に其姓名のみを掲ぐることに然り、一世紀の間に斯る校舎は非常に増加して、教育社會に大功を奏したれども、是等の事柄を記するは、はてし際限なきことなれを、皆省くこととなしぬ、但念の爲に茲に記し置くべき事あり、佛國革命の起れる時に當りて、サン、モール會は國內幾と一百に近き校舎を有し、地方によりて生徒の數千人以上の多きに達したるものもありたりと云ふ事はなり、此一事を見む他は皆推して知るべきなり、吾人の是に於て注目すべき所は、同會の教員所謂黒衣婦人等の一隊は、如何なる精神に鼓吹せられて、此隆盛を致したるかと云ふに在り、然り、斯る質

直一偏の婦人を動かして、此の如き偉勳を奏せしめたる原動力は果して何者ぞ。

(十)

凡て會の精神は其創立者の精神に外ならず、サン、モール會の創立者バレ氏は、其性極めて嚴酷にして、百難に介しても挫けざる氣力と、終始一貫の熱誠とありたり、氏は此氣象を會員所謂黒衣婦人にも吹込まんとせり、蓋し此三つの事は實行の際須臾も離るべからざるものなり、何となれを熱誠も氣力なくんを事を行ふ能はず、氣力も嚴酷を缺かぬ徳となる能はざれをなり、凡て徳行の發條となり、たまふ靈魂となるものは自身に對して嚴酷なるに在り、氏自らも亦屢々左の言を吐けり、曰く『良指導者は其指導する所の人に就ては、全く満足すべきものにあらず、其人如何に善事を爲し、又如何に完全の域に進むども、尙其上に進ましむ可き所は始終之いっあれをなり』、此言は蓋し氏自らを描けるものとして見る可きなり、同會の目的は一に懸つて教育に在りたり、天下に教育より主要なる事業なきを以て、凡ての事を皆此點に集中せしめたり、兒童のうちは分別を以て事理を辨するものにあらず、人より教へらるゝ所を知らずして眞似する

のみ、故に學ぶと云ふ、學ぶと眞似するとは蓋し語源を同ふす、後日成長して人となりても、幼時受け得たる思想習慣等は、容易に脱し得べきものにあらざ、是故に眞理と善徳とを以て人を教育するは、個人に取りても、社會一般に取りても、極めて必要なる事なりとす、ハレ氏は會員に能く此天職を竭さしめんが爲に、人に教ふる所の事は先づ自ら明に之を知り、知りたる上之を行はんことを欲したり、蓋し斯くせざる時は其教授は人の心を喜むしむること能はざるのみならず、生徒に對しても權利なきに至るの恐われをなり、氏は尙其上に會員をして、質素ながらも清潔を重せしめ、能く任に適すと雖人に誇ることなからしめ、又も之に一物をも所持せしめず、其書籍其衣服等に至る迄、皆之を會の所有に歸し、相互には眞誠の友愛を盡して、宛も姉妹の如く、敢て悪口いふこともなく、批評うはさすることもなく、嘲弄することもなく、冷淡の風體を示すこともなく、不快の顔色を顯はすこともなく、剛情怨恨等のこともなく、總ての人人に對して親切に、柔和に、又堪忍に、會の總裁と分長とに對しては、心底しんそこより服従する事等を約束せしめたり、蓋し長者への服従と同僚の親愛とは、同會の連鎖つなぎにして、

克己と献身とは同會の土藁にてありにき、氏は尙又其上にも會員の窘迫せまらるゝこと、輕蔑あやうせらるゝことをも希望したり、是れ會員をして小心翼翼として、用意に用意を加へしめ、警戒に警戒を重ねしめて、驕ることなく、人を侮ること等なからしめん爲にてありたり、會員の精神に就ては、氏自ら左の如く記しるせり、曰く、

『良教員たるべきものは、其精神は豪俠勇敢に、其心志は高尚寛大にして、始終いづつ與ふるを欲して受くるを欲せざる底の氣概なかるべからず、然れども能く茲に注意せよ、恐くは傲慢心の生じ來りて、萬事の價を損せんことを、要するに精神は眞面目まじめならんを要すれども、是が爲に悲哀憂鬱に至らざらんことを期すべし、極端と極端とを避くるは肝要なり、夫れ眞面目ならざる者は輕佻浮薄に陥るるの憂あり、之に反して餘り眞面目に過ぎる者は往々自負高漫に失するの恐あり、二者何れも極端なり、徳は其中庸に位す。』

善い哉言や、眞面目にして謹慎に、柔和にして強き婦人を作るには、實に此の如く寛嚴其中を得て、過不及の恐なき良教員を要するなり、嗚呼是れ實に知慮深き士が二百年前

に理想したる所にてありぬ、ハレ氏の精神實に此の如く、同會の精神亦實に此の如くなりき、其心志や高尚にして且勇強なりしと謂ふべし。

(十一)

同會は此の如き精神を以て成立したるを以て、其組織極めて鞏固にして、能く創立者ハレ氏の理想に適合したり、去れハレ氏の死後百年を経過したる時、他の之と類を同ふせる集會若くは團體が、往々皆其綱紀弛んで、收捨すべからざるに至りしも、同會のみは依然として當初の活氣と熱誠とを失はざりき、其後佛國の革命起るに當ても、同會は國內百餘ヶ所に在りて、國の光榮の爲め、民の福利の爲に盡瘁せる事、毫も平穩無事の日に異なることなかりき、革命黨は之を見て、斷然同會をも他の會と共に解廢せんことを決したり、乃ち一千七百九十二年八月十八日の法律は其令を傳て曰く『凡ての修道的集會と、凡ての世俗的團體は、其男子のものたり、女子のものたるに係らず、其教會的たると世間的たるとを論せず、彼の病者の慰撫に従事するものに至るまで、殘らず解体廢滅して許す勿れ云々』、嗚呼何ぞ其令の酷なるや、當時無政府黨の輩は大聲

叫んで曰く『病者よ、革命者ならぬ者の手に看護せらるゝよりは、寧ろ死せよ、若し我黨にあらざる者を以て弘布せらるゝものあらむ、教育も滅せよ、學術も滅せよ、故郷も滅せよ、佛蘭西全國も滅亡せよ、唯だ我黨の主義のみ活きよ云々』、此輩の口を以て言はしめむ、斯の如き事も尙且愛國の精神なりと云へり、蓋し彼等獨り眞誠の愛國者にして、他は皆非愛國者と見做したれをばり、嗚呼何ぞ其言の殘忍なるや、百年後の今日より之を聞くも、尙且毛髮悚然たらずんをわらず、怪獸的の言動とは是等を言ふべき、然りと雖佛國の革命は畢竟血と火との恐ろしき暴風と見て可なり、此暴風は十五年の間寥々として萬事を打撃し、其善たると惡たるとに係らず、一切之を滅却したり、所謂玉石を混同して、一舉に之を秦火したるものと謂ふ可きなり、其弊害を除きたるや善し、然れども之と同時に凡ての善美を滅盡したるは、慨して慄すべきなり、前記せる解廢の令はサン、モール會に蔑視せられたりと思はれざらんが爲め、且は同會も確かに他の集會と共に解廢せられたりと云ふ事を明に顯はさんが爲め、同會創立以來の凡ての名稱を一々法令の上に明記して之を發布し、又之と同時に同會の所

有に係れるものを残らず没収したり、然れども革命時代の歴史は人の皆普く知る所なるを以て、余は今是等の事を詳しく記するの必要なしと思ふなり、併しながら茲に最も慨嘆すべき事あり、此時に當りて世の青年子女は全く無教育に放任せられ、或は革命主義の學校に於て害毒の教育を飲ましめられたりと云ふ事はなり、勿論今迄熱血を濺いで子女の教育に従事し居たる同會員所謂黒衣婦人等は、飽迄も其學校を棄てざりしかども、革命黨は暴力を以て之を強迫し、怪獸的言動を以て之を虐遇したるが故に、止むを得ず其學校を退かざる可からざる場合に立至りぬ、是に於て乎同會員は分離散亂の不幸に遭ひ、隠見出没の危険を冒し、有らゆる苦楚艱險を嘗めたり、然れども茲に吾人の不思議とすべきは、其間同會員の心志は始終一の如く、何れの處に散するも、又如何なる苦辛を嘗むるとも、決してサン、モール會員の資格と面目とを汚さざりしと云ふ事はなり、男子と雖尙難んずべき所、纖弱なる婦人にして之を能くせりと云ふは、實に以て不可思議にあらずや、此不吉の時代に當り、人心の弱所缺點一時に顯はれ、敗徳汚行到る處に行はれ、破廉耻、沒道義、不忠不信、非理非倫等の行動紛然として社

會の上に湧起盆出したるにも係らず、同會員の中には唯だの一人なりども、其會の名譽を傷けたるものなかりしと云ふに至つては、愈々以て不思議と謂はざる可らず、然れども歴史上此の如き者一人をも擧ぐるを得ずと云へむ、亦以て争ふ可からざるの事實として見る可きなり、彼等會員の一地方より放逐せる、や、一時々石を擲つて之を追出したりと云ふ、或は服を替へ名を變じて他縣に往きし者もあり、或は同縣の他の土地に移りたる者もあり、或は又同會宅地の一部分に住せる者もありニームに於けるが如き即ち其一例なり、或は又其家族若くは朋友の宅に歸されたるものもあり、然れども如何なる處に到りても、子女を集めて之を教育するが爲には、始終肺肝を瀝ぎ、血を絞りにて従事しぬ、彼のルハン、リエス、モントハン等の諸縣に於ては、土地の權を以て幾回か之を退け若くは之が代りを立てんと欲したれども、毎度其功を奏する能はずして、終には陰に陽に之に依頼せざる可からざるの止むを得ざるに至れり、然れども革命黨も又此時革命主義の教員を作りたることあり、稱して之を『共和政府の姉妹』と云ふ、去りながら其革命主義を以て子女の教育に應用するに至りたるときは、毎々奇怪の婦人を

製造したるを以て、茲に又々放逐したる黒衣婦人を呼戻さるべからざる場合に至りたり、されど其中には非常の酷遇を受けたる者もあり、マルティン、及びフメール婦人のツォルーズに於けるが如き即是なり、二人は囹圄に鎖されて、備さに苦楚艱險を嘗め、二年の後漸く出獄するを得たり、彼のサンタアンボロックスに於ても亂暴極まる市井無頼の人民より、殆ど脚下に踏摧かれん程の虐待を受けたる者もありき、此時同地の有力家たりし新教者ハイユなる人は、黒衣婦人が身に一點の罪なくして、此の如き虐待を受けつゝあるを見るに忍びず、自ら進んで之を助けんと欲し、會長プロンティンなる者に一の避難所を呈したり、會長は三年の間身を潜めて此處に住し、日夕主人の子女を教育せんが爲に鞠躬盡瘁して、專制時代(革命間過激黨の政權を執りし時代)に至るまで一日も外出せざりしと云ふ、同會員にして斷頭場に引かれたるものありや否や、歴史は之に就て黙々たれど、それ丈け同會の名譽を缺く譯なれども、それ丈け亦革命黨の耻辱をも少ふせりと謂ふべきなり、蓋し革命黨と雖、國民教育の爲に斯く迄熱血を濺ぎたる婦人の生命は、深く之を尊重したるものと見ゆ。

(十二)

然れども過激なるものは持續せず、暴風にも亦終あり、一朝其風静まり雲散するに當つては、天氣快晴にして、天日再び麗はしく顯るゝものなり、佛國革命の暴風も亦此の如し、其不幸なる風雲の一過したる後、不世出の一大人物顯はれ出でたり、昔者北國の詩人が雲の中に不可思議なる人物を觀たりと想像したるが如く、佛國革命の暴風の裡からも、實に不可思議なる人物一人起り出でたり、撥亂反正の才を抱ひて、國家の紊亂を矯正し、社會の秩序を回復し、凡て國利民福となるものを恢擴して、天下を一新したるは實に此人物なりとす、其名誰とかなす、言はずして知る、是れナポレオンなるを、革命黨は萬事を破壊したり、然れども一事一物をも建設すること能はざりき、是に於て乎ナポレオン出で、一千八百零一年五月一日を以て、一の法令を發し、再び茲に國民教育を成立せしめたり、然れども新教員の不適任にして又其不道德なる、父兄の信任を缺き、家族の中にも分裂を來たす等の不都合ありて、遂に學校を廢棄するに至りければ、又々茲に他の改革の手を要するに及べり、ナポレオンの眼識は此時サン、モ

ール會が國民教育を回復するに如何をかり力あるやを明に看破たり、當時同會は追放せられたるにも係らず、毫も當初の活氣を失はずして、教育上活潑々地の運動を爲し居たり、蓋し同會員は四に分離散亂したるも、教育事業は暫くも之を廢止せざりしが上に、多くの會員は竊に會長と交渉して大に爲すあらんことを企てつゝありしかを、忽ち茲に慧眼なるナポレオン帝の注目を惹くに至れるなり、同會も亦帝の注目を惹くの點に於ては決して人後に落ちざりき、然れども是が爲には正規の手續を経てナポレオン帝まで願出でざるべからず、此願や先づ其母レナチヤに提出せらる、レナチヤは固より義侠に富める婦人にして、凡ての美舉には雙手を舉げて賛せられたる方なるに、佛國天下の新た^ニに其子に依つて回復せられたるを自負しつゝありし折柄なれを、容易く其願を聽入れ、傲然として同會の保護を承諾し、此事に就き自ら出で、帝に奏上せんことを約せり、恰も好し此時又一の好機會は他の一方より出で來りぬ、羅馬教皇ピオ第七世は、新帝ナポレオンの戴冠式の爲に巴里府に莅^{のぞ}まれたり、一は世界萬國の教權を握れる法皇、一は全歐の政柄を握れる不世出の新帝、此時兩々相會して國家重要の問題

を種々談議したりしが、其時同會の事も亦其議に上りたり、教皇は口づから同會の事業を裁可し、帝も亦一千八百零五年三月を以て、公約上の裁許を之に與へたり、然れども確定せる裁許も早晚下さるべからざりき、請ふ今其如何にして與へられたるかを左に記さん。

一千七百九十年、專制時代の過ぎ去るや否や、モントパン校の校長マダム、カプロニはモントパンに於て、黒衣婦人の舊寄宿舎を一新して、其服裝を當時の服に改變しければ、其名忽ち遠近に達し、國內四方より生徒を遣す者陸續踵を接して起り、殖民地よりも入校を願ふ者あるに至れり、同校寄宿生の中最も有名なるものはステファニー、ド、ポーハルネーにして、後日ナポレオン帝に配したるシヨゼピンの従妹にして且其被後見者にてありき、シヨゼピンは後に皇后となり、其名誰知らぬものなきに至れり、ステファニーは八九年の間モントパン校に寄宿しけるが、芳紀十五になりしとき、ナポレオン適々帝の位に即き、召して之を皇后の側に侍せしめたり、帝始め以爲らく、此少女は地方の産にして、地方の教育を受けたるものなれを、必ずや遠慮に過ぎ、臆病

に失して、小膽畏縮の小供ならんと思へしに、ステファニーの來るに及んで、事大に其豫想に反したり、彼は其温雅なる天性、高潔なる風姿を以て、宮中を驚かし、新帝をも驚かしたり、彼のかれ一舉一動に顯はるゝ所は、宛も舊禮古格の光の如く發射して、燦然新王室を照したり、是に於てステファニー妃は、宮中の花と愛でられ、帝室の珠と仰がるゝに至りぬ、ナポレオン帝も亦之を入れて己れの養女となし、一千八百零六年遂に之をバード大侯の嗣子にめまは娶したり、妃の宮中に在りたるや、屢々昔の教員の事杯を想出して之を語り出でけるが、其合葬式の前夜に當りたるとき、養父ナポレオン帝に請ふて、其嫁資としてサン、モール會の裁許狀を與へられんことを願ひたり、此時皇太后レナシヤもステファニー妃と共に其願を同ふしけれを、帝は欣然之を承諾し、遂に一千八百零六年三月十二日を以て、確定せる裁許狀を同會に下したり、是に於て乎巴里に遺存したる舊黒衣婦人等は、同年七月十八日を以て再び舊來の服裝を穿つことを得、ありし古の事杯を想合せて、太く感涙に咽びたりと云ふ、此服裝の改變式はナポレオン帝の叔父に當れるカルジナル樞機教官へエスシユの館に於て行はれたり、此時帝室の聖堂の

金衣玉服を拜借して、此式を執行したりけれを、なにごともりつは萬事立派に行はれたりとぞ、黒衣婦人は此の如く復古の恩典に浴するを得、須臾にして皆償金を納めて、サン、モールの舊會に復歸し、爾來は同所に舊來の事業を繼續して、心安らかに其生を送るを得たり、然れども樞機教官へエスシユは其妹即ち皇太后と心を合せて、再興せる同會の繁榮を謀らんが爲に、帝に請ふて同會のため前後二回の保護證書を求めたり、前書は同會の借財返却を補助する爲に、一萬五千フランを與へ、其外年々保護金として五千フランを與ふる證書にてありき、此證書の與へられたるは一千八百零八年なり、後書は同會の維持を助くるが爲め、一切の租税を免すと云ふの證書にてありき、此證書は一千八百零九年三月二十八日を以て與へらる、同會は斯の如き恩典に預りたれども、尙舊時の盛大には及ぶに至らざりしと云ふ、蓋し革命以前には會員百三十七人、校舎一百も有りしが、再興の時には其再建せられたる校舎僅に二十七のみ、當時校長の遺憾としたりし所は、各地方の請求に應じて充分教員を供することを得ざりしに在りぬ、彼も一時此も一時、亦各々其勢に遭ふて然るか。

(十三)

百年以來佛國の政府は朝暮に更迭し、其更迭の回数實に指を僂むるに遑めらず、ナポレオン帝に嗣で立ちたる者はルイ十八世なり(一千八百十五年)、此時サン、モール會はさしたる改變なかりき、國旗の色は幾回變りたるも、同會の婦人は固より政治に關係なければ、毫も之が冷熱を感せざりき、然れども記せよ、若し「男子は法律を作る」の語してに眞ならむ「女子は風俗を作る」の語も亦信なり、然り而して風俗なるものは國家必須の要素にして、治國者の須臾も忽諸に附す可からざる事なり、是れ即ち女子教育に熱血を漲げる黒衣婦人が、如何なる政府の下に立てても、毎度其格別の保護を得たる所以なりとす、ルイ十八世の御宇に至りては、先帝ナポレオンの時代よりも一層優渥なる眷顧を蒙れり、先代の皇太后レチシアと樞機教官ヘスシユの後には、王姪マダム、ラチエセス、ダングレヌと稱せられたる御方(革命の時殺されたる佛王ルイ十六世の女)之に代りて、同會に一方ならぬ庇護を垂れたり、同會は其紹介と轉達とに依りて、ルイ十八世及び其弟シャール十世より、舊時の宅地を回復するが爲め、志願

教員の住宅を擴張するが爲め、且は自立し難き校舎の扶助を仰がんが爲めに、非常の眷顧を蒙れり、蓋し新王室は同會を庇蔭するを以て殆ど一の務となし、此點に就ては成るべく先帝に優らんことを欲し、同會をして先帝より受け得たる恩遇を幾分か忘れしむるに至らしめたる事なきにしもあらず、去りながら同會は斯る過分の寵に浴したるが故に、平穩無事の境に自由の羽を伸げすを得て、會連日に繁榮し、會員月に増加して、幾ど茲に革命以前の隆昌を呈するに至れり、ラングルに於ける彼のマダム、リエゴ、俗にマ、ソ、リエゴと稱せられたる校長の如きは、大に土地の尊敬を受け、其病人を見舞ふが爲に出でたる時杯に當りては、到る處に歡迎優待せられて、中々に今日想像することも出来ざる程なりき、此類の逸事は蓋し枚擧に遑められども、今は皆之を省く、一千八百三十年に當り、再び革命の亂起りて、舊王室再び倒され、廢王の從弟ルイ、ヒリップ立つて位に即き、初めて立憲國の王となりたれども、在位僅に十八年に過ぎずして、又々革命起り、一千八百四十八年二月國王を廢して第二の共和政府となりしが、未だ五年を出でずして是も又倒され、帝政再び茲に呼び叫ぶれ、一千

八百五十二年の終りに當り、ナポレオン三世帝位に即き、一千八百七十年まで國を治めしが、獨逸に敗北して擒となるに及んで、第三の共和政府となる、即ち是れ今日まで繼續するものにして、百年來の政府中最も壽命長きものとす、此間同會はさしたる變動もなく又さしたる損害をも受けたることなしと云ふ。

(十四)

同會(一千八百三十七年より一千八百七十七年に至るまで)の歴史は、皆畧して一婦人の歴史に在りと謂ふも不可なし、婦人は同會の總裁にして、同會をして四十年の間全盛を極めしめたる者、同會の爲には實に大功勞ありたる者なり、其活潑々地の氣象は、歲月と共に衰へず、其堅忍不拔の精神は、萬難に際しても摧けず、識見高遠、知能幽邃、其眼光は上天の光に照され、其雅量は天高く海深く、其愛に溢れつゝなる仁心、其母の如き慈情等皆是れ同婦人が上下四十年間に輝き出でたる性格徳能なりとす、故に今日のサン、モール會所謂黒衣婦人會の眞面目を知らんと欲せむ、須らく先づ同婦人の性行言動に徴して知る可きなり、請ふ左に其概略を記さん。

婦人はルイ、ド、フォアス侯の女、母はジョゼピン、ド、メヂャニと稱し、父母何れも門地貴く徳名高かりし者、去れを其女ルシール、ド、フォアス(同婦人の名)も亦其徳父母に耻ぢずして、優に家間の榮となるべかりき、一千七百九十九年佛國ピレネー山の小丘の頂上オリギヤッに生る、未だ幼き時よりして、舉止快活、氣象寛大、而かも心志朴實眞摯にして、佯僞、僞言、不義不正等の事は飽まで之を嫌ひ、物事を過大にする言動、材徳を擬する容態等に至りては、最も深く之を嫌棄したり、自由不羈の精神に富みて、女ながらも好んで山林田園に徘徊り、樹木に攀ぢ登り、或は兒女を集めて一隊となし、背後に之を扈從せしめて戯る、等を以て常に樂とせり、嬉戯の際若し誰か欺誦を爲し、偏頗なる措置を爲し、或は弱者を意地める等の事あるときは、忽ち小獅子の如く腕捲くりして犯人に飛掛り、嚴しく之を懲戒したりと云ふ、其短所缺點とも稱すべきは、小供らしき高慢と片意地を張る事にて、自ら眞なりと信じたる時は、如何なる事ありても一步も曲げざりき、殊に奇とすべきは、人は虚言こと能はざるものと思ひたる事はなり、一日家僕戯に之を誑しける時、直に色を變じて曰く「爾は我を

誑したる故、我は爾を愛せず』と、爾來果して怨を含んで永く之を遠け居たり、家僕は其機嫌を取直さんが爲め、種々様々に己が正直の證據を示して、以後は決して虚言申さず、串戯にも虚言は申しませずと堅く誓ひたる上、漸く其心を和ぐるを得たりとぞ、生長の後ツルーズに往き、黒衣婦人の校舎に入りけるが、生來の氣象は亦忽ち元の如く顯はれたり、勿論正直にして且忠誠にてはありしが、彼の軒昂不羈の精神は折に觸れて屢々顯はれ出でたり、然れども熟達せる教員の手に入り、嚴格なる規則の下に服して、事の理非を最と懇切に言聞かしめられたる時、氣象茲に一變して忽ち完全するに至りぬ、爾來は何事にも優等を占めんとする時にわらされを、高慢を起さず、何處までも義務を果さんと欲する時にわらされを、意地を張らざるに及べり、年二十歳に達し、萬藝備はりて何ひとつ不足する所なきに至りけれを、去つて他の道に就くも榮耀幸福の生涯を送る事は最と易かりけれを、其雅量の天空く海淵く、其他人を救ふ心の山高く水深けれを、黒衣婦人會の生涯の若勞多きにも係はらず、其世道人心を益するの最と大なるを見て、斷然茲に意を決して自らも亦同會の教員たらんことを願出で

たり、其母(其父は既に死せり)は我女の一大決心を聞きて、喜悲の情交々臻りけれを、心竊に自負する所もありけれを(母情としてはさもありぬべし)、遂に之を許したり、ルシールは母の許を得て直に同會に入り、甘んじて會員の下級に居り、他人に對する遜讓と事務に對する活動との外、渾然衆と混じ毫も異なる所を顯はさざりき、故に或時之を知らざる者は、其熱心に裁縫し居る様子を見て『彼は仕立屋の女にてはあらざりしや』と問ひけるに、知人之に答て『否とよ、彼の御方は侯爵の御令嬢にればしき』と申しけりとなん、此一事を以ても其如何に謙讓して門地を包めるかを知るに足らん、其後幾許ならず、撰まれてルハンの會長となりたれども、謙讓の心は須臾も失はず、常に左の言を服膺して、我言行の金戒となしたりとぞ、曰く『人の上に立て命ずる者は、已れ先づ凡ての人の婢僕たりと思はざる可からず』、是故に會長の位地に在りながら、常に萬事の監督を爲したる而已ならず、會員に差支ありたるときは、己れ代つて其業務をも行はんことを始終心掛け居たり、然れども又慈善的事業に就て語り、献身的事業に就て語り、或は義務を竭す忠誠等に就て語れるときには、天然の辯口を衝ひて出

で、忿然として泉の湧き出づるが如かりしと云ふ、一たび其辯を聞くときは、如何なる難事も出来がたきことなきに至ると其生徒は云へり、蓋し右等の徳能は由來同會固有の長所たるが如し、故にポンタルリエに於ても或る同會員の墓碑に左の銘あり、曰く『其性行凡ての人に感心せられたり、然れども己れには知られざりき』、眞率の中に高崇の光ありと謂ふ可し、他に又一人ありたり、マダム、サンレミと稱せらる、此人極めて名高きものにて、如何なる處に善事行はるゝも、人必ず先づ第一に指を此人に屈したりと云ふ、故に此人に就ては一の諺あり、曰く『マダム、サンレミは夜中よなかにも晝の如く用意整ひ居れり』、蓋し慈善の業杯には一歩も人後に落ちざりしを謂ふなり。

(十五)

マダム、フォードアスは此の如き徳能ありたるに依り、後日撰むれて同會の總裁となるに至りぬ、蓋し同會を管理するが爲め、同會創立者の精神を繼續するが爲め、及び其赫々たる功勳を傳承するが爲めには、此婦人よりも適任の者を見出す能はざりけれなり、婦人は一千八百三十七年七月九日を以て撰立せられけるが、一千八百七十七年

に至りて又々再撰を蒙り、身を終ふるまで總裁たらんことに定めらる、同會は此間に於て一大長足の進歩を爲し、前代未聞の擴張を成したり、是れ當に佛國內のみならず、延て國外にも及べり、去れを一千八百六十年西班牙のバルスロマにも、一の校舎建てられ、尋で二年を経(一千八百六十二年)伊太利亞のモナコに於ても、シャレール第三世の請願ど其母の保護どに依りて、又一の校舎設立せられたり、此校舎は後大に隆盛を極めたり、同校の初めて開設せられたるや、教員僅に三人、生徒も僅々四十人内外に止まりしが、今日に至りては小學校あり、避難所あり、寄宿舎等ありて、教員は四十五人、生徒は一千有餘人の多きに達せり、同會は又此間に遠く海外までも其羽翼を伸長するに至れり、一千八百五十一年より一千八百七十七年の間には、ピナンに、シンガポールに、マラッカに、及び極東に位する我日本に至るまで、前後十二回會員を派遣したり、是に於て乎創立者の豫言は成就せられて其應驗を見るに至りぬ、曰く『我會員は遠く世界の極まで到らん』我日本は西洋と大に其風俗を異にし、マラッカの如き國とは固より同一に論すべきものにあらざるが上に、同會の教員所謂黒衣婦人たるも

のも、未だ我邦の言語、風俗、人情等に精通せざりしを以て、今日に至るまでさせる効果を奏する能はざりき、加之ならず是等黒衣婦人等は他國に於て種々の先入習慣等を帯び來りければ、是が爲め尙一層困難を感ずるに至れり、同婦人等が東京に於ても、横濱に於ても目覺しき事業を企つるに至らざりしは、蓋し是等に原因するか、然れども幸に是等の困難は歲月と共に減じ、經驗と共に消失するものなれば、若しも同婦人にして堅忍不拔の志を以て自己の先入習慣を打破り、一片耿々の赤心を以て我邦の爲に盡さんと欲するあらむ、早晚成功するに至るや期して待つべきなり、我日本國民は由來義侠の民なり、同會の精神を知り、同會員の丹心を知らむ、如何ぞ之に賛同の意を表せざらんや、勿論日本の教育を授くるには、吾人之に待つ所なし、國內學校備はる、何ぞ之を海外の人に仰がんや、然れども今日の日本は昔日の日本にわらず、鎖國時代は既に過ぎ去れり、澎張的日本は將に來らんとす、世界文明の水平に達する今や其時期なり、此時に當つて我邦の父兄たるもの、其子女に日本の教育と共に泰西の教育をも授けんと欲する者あらむ、黒衣婦人に待つ所必ず多からんとす、同會の功業成績等は

古往今來屢々官民に實驗せられたれを、今や既に疑ふべからず、オルターズに於て一千八百五十四年に設立せられたる學校は、初め僅かに七人の生徒のみに過ぎざりしが、一千八百七十六年に至りては、大に隆盛を極め、其名亦大に世に顯はるゝに至りしかを、同校の校長は佛國共和政府の文部大臣より官報を以て、特に『管理行届き指導能く備はれり』と云ふ賞詞に預るを得たり、一千八百七十年及び一千八百七十一年に當り、佛國大に亂れたる時、同會の教員等は他の人々の如く、進んで愛國の義務を盡したり、此時同會の學校は直に戦地病院となり、教員は看護婦となりて、到る處に負傷者を慰安したり、勇壯なる此婦人や、幾回か其食を分つて兵士を養ひたるか知る可からず、巴里府の重圍に陥りたる時、及び同府が無政時代になりたる時、同會のみは一個の彈丸をも受けず、依然として掠奪の外に立ちたり、此時に當つてや、佛國は陰雲に鎖され、血雨に浸され、ナポレオン三世の帝室も外に移され、佛國の舊社會將に消滅せんとするに至りしも、同會のみは依然是等戦亂の外に立ちて、國の革命をも知らず、世の變遷をも知らざりき、是故に若し同會の創立者を再び世に起して之を視せしめむ、

必ず其己が嘗て二百年前に植ゑたる木の森々として生育したるを見て、一驚を喫するならん、然れども彼は何處に於ても其己の植ゑたる木を認むるに難からざるべし、何となれを到る處に同一なれをなり。

(十六)

前後四十年間同會の脳髓となり、精神となりたる同婦人の性格徳能は、今日の婦人に取りては最も尊重すべき龜鑑なり、彼は太く自負の事を嫌ひ、傲岸不遜の念は苟にも起さざりき、故に人の阿り諛ふが如きときには、毫も之に耳を傾けず、成るべく之を他に轉せしめんことを務めたり、或時人々相會して少しく彼を譽めけるに、彼直に答て曰く『譽を與ふるは棺を蓋ふて後の事なれを、それまで待たれよ』、又自ら出来る事は、成る可く自ら之を行ふて、人に厄介を掛けるが如きことなからしめたり、人若し之を助けんと欲するときは、直に兩の手を示して最と鄭寧に辭つて曰く『有り難うもるが、私は始終此二人の女中を有つて居りますから、御安心下され』、若し又止むを得ずして他人の助を願ふ等の事あるときには、始終鄭寧なる言葉を以て願へしかた、配下の者も皆

恐れ入つたりと云ふ、病氣杯にて起居不自由の時の外は、何事も自ら手を動かして働きたりどぞ、又謙遜の二字は如何なる場合に際しても其口を離れざりき、曰く『我々は御先祖の遺徳を能く遵守せざるべからず、御先祖の特質とも云ふべきものは謙遜なり』、子女を教育するに當つて、第一に重んじたる處は實に謙遜、謙遜は蓋し彼れの秘訣なりき、曰く『子女を感動せしめ、子女を敬服せしむるものは謙遜のみ、謙遜は實に子女を主宰する王なり、故に幼き時より其心に此徳を銘刻するべからず』、是に由りて之を觀るときは、女子教育の問題は容易く解釋せらるゝものなり、即ち如何にせむ女子に賢良温雅の淑徳を失はしめずして、之に剛強勇敢の氣象を保たしむる所の教育を授くるを得るや、之が答は最と易し、謙遜と謹慎の二徳を以て教育の土臺とするに在るのみ、世の女權論者が自任傲岸の氣象を鼓吹して、女子にね天婆たれと勸むるが如きは、大に誤れるなり、生徒の心性を涵養せんが爲には、彼は先づ教員たるもの心をして寛く且大ならしむるを以て、唯一の秘訣となしたり、曰く『凡そ生徒を愛するときには、其生徒一人なるが如くして之を愛せざるべからず、國土を膏腹ならしむる河水は、其潤

澤を遠き地方まで普及せしむるも、近き國土には毫も損害を與ふるものにあらず、教員の心も亦然り、生徒を愛すること愈々博けれむ、其愛愈々熱く活動するに至るものなり、彼れの性は激烈なりしも、務めて温雅にして、百艱の間に介しても、始終虚心坦懐にてありぬ、千辛萬苦の場合に際しても、神志自若、顔色依然として、滿面に微笑を湛へ、毫も靜穩優雅の相貌を變じたることなかりき、彼は居常我心の苦痛を微笑の中に包みつゝ語つて曰く『自己の苦の爲に他人までも苦めるは、大なる不義なり』、彼は萬事に眼を注げども、誰にも不都合厄介を掛けざりき、彼れの主義は自ら實驗し、若くは他に確實なる證跡なくんむ、決して人の惡事を信じ或は人を猜疑する等のことをなさずと云ふに在りたり、彼の常に口したる所は『人は正理に依つて生活すべし、感情に依るべからず』と云ふ語にてありき、婦人の口より出でたる語としては、感驚すべきなり、彼れの居常人に教ふる言に曰く『注意すべき事には感せんと欲し、感情を害ふべき事には感せざらんを欲すべし』、彼は篤實にして能く事理に達したれむ、外來の人に接するときにも、其交際甚だ嬉れしかりし、彼に接したる人々は皆深く彼を尊敬

したり、彼は温良質直なりしかども、又何となく高潔優雅たりき、彼は其精神の極めて鋭敏なるにも係らず、其判断の方直にして、其心情の誠實なる、見る人皆感嘆せざるものはなかりき、彼が其會に與へたる師範、及び彼が同會員に垂れたる教訓等實に以上述べたるが如し、彼が前後四十年間最も力を盡して薰陶したるは、同會の年若き教員にてありき、彼は日々之を己れの側に置いて誘掖したり、彼れの最も人に長じたる點は、婦人には得がたき所の二徳を兼有したるに在り、精神の徳と心の徳即是なり、彼れの知能は高遠にして其識見亦方正なりしかども、是が爲に心の飛躍を阻碍することばなかりき、其心も亦知識の裁斷を待たずして事を行ふが如き潜越の事なかりき、合理的なることは他に比類なく、温和なることは宛と母の如くなりき、一千八百七十七年八月二十七日を以て彼は遂に死せり、婦人としては蓋し完全に近かりしと謂ふべし、會長としても最も人に愛せられ、最も人に敬はれたる者にして、今日に至るも其名嘖々として稱揚せらる。

彼れの死後其事業を繼續するが爲に、嘗て彼れの側に侍して最も能く彼を知りたる婦人を撰びたり、蓋し日々彼れの性行に接し、彼れの識見を分ちたるものは、彼れの精神を繼承して、同會を管理するが爲め最も適任なりしを以てなり、是を以て今日に至るまで、同會には彼れの威靈今尙活動しつゝあるが如し、爾來二十の星霜を経たれども、同會の精神には毫も變動なし、單だ世と共に其學科の改正ありたるのみ、然れども其成功の點に至つては、古も今も異なるなし、人若し之を疑はゞ、佛國若くは英國に行て自ら之を檢せよ、蓋し英國にも十年以來同會の學校設立せられぬなり、凡そ女子の知る可く、學ぶ可き事は、悉く之を教へ、而かも其性其年の美點を損する等の憂なし、女子をして才學高からしむると同時に、淑徳をも之に隨伴せしめんとするは、同校宿昔の目的なり、距今六年前（一千八百九十一年五月三十一日）ニームに於て、黒衣婦人會の（同地に入りてより）二百年祭執行せられたり、祝祭は三日に涉り、同會出身の生徒皆集り來りて、現在同會に學びつゝある生徒と共に、歡呼洋々の裡に之を祝したり、當時五個の新聞雜誌は同二百年祭に就き、略ぼ同一の事を記載せり、余は其中一の雜誌

を左に引かん。

『此二日間は如何に健全なる感動ありしぞ、學問と徳行との古傳を斯くも立派に遵奉し來れる教員等に取りては、如何に光榮なる祝日なりしぞ、嗚呼彼等は上下二百年の間サン、モール會の婦人として、我縣下の青春妙齡なる子女より始終愛せられ、始終敬せられたる教員にてありき、舊生徒と新生徒は彼等の周邊に圍繞し來りて、一は過去を代表し、一は將來を代表しぬ、…生徒は皆胸襟を披ひて、謝恩と愛情と尊敬とを言顯はし、教員は又之を見て、此の二百年間佛國より寄托せられたる生徒の靈魂に、良好なる種子を蒔きたるの無用ならざりしを知るを得たり。』（右は一千八百九十一年五月發刊のルター、ド、ミヤ雜誌より譯出す）

此時顧みて往時を追回し、二百年前ニームの顯官大職が禮服盛裝して以て、時の王ルイ十四世より遣はされたる黒衣婦人を歡迎したる事杯を想出し、爾來黒衣婦人の熱誠に基きたる希望は、絶へず實行せられて、着々好結果を奏し來りたる事杯を思合せて、師弟諸共に天の同會に對する山高く水深き鴻恩を銘謝したりとなん、其他ツォルト

ズに於ても、モントパンに於ても、同じく歡天喜地の裡に同會の百年祭を祝したれども、今一々是等の事を記載する違なし、然れども尙此外に忘却に附す可からざる一の祝祭あり、余は今茲に筆を擱くに臨み、同祝祭の記事を掲げて以て、本篇の終局を結べんと欲す。

一千八百九十四年九月八日、同會の總裁入會以後六十年期に際し、其金剛式を執行したり、此時に當り、會員も生徒も皆共に詩を作り歌を讀んで、其高德を九天まで稱揚しけれむ、此八十有餘歳の尊堂は、破顔一番、爽快の答辭を放つて曰く、

『諸嬢よ、我は今嬉しき過言に接しぬ、眞面目に觀念して篤と之を熟考せん、諸嬢は彼の檻木を見ずや、森然として空飛ぶ鳥を庇保し、地に咲く小草を陰護すにあらずや、我も年老ひたる點に於ては、此大木に似たる所あらん、去れど此大木の如く我天職を盡したるや否やは、我之を知らず、…我今我目には嬋娟たる薔薇、謙遜なる堇花等の美艸百花及び其他の珍賜玉品の我周圍四邊に積んで堆を成すを見、耳には諸嬢の啾啾たる合曲、洋々たる妙歌を聽て、心大に悦びたれども、我心は常に是等外形の事、就

中過褒溢美の言等に満足するものにあらずと知られよ、我の好む所、我の希望する所は外に在り、諸嬢若し我をして眞個に我金剛式を執行せしめんと欲せば、我は諸嬢も皆各々我冠上の金剛石の如くならんことを望む、…諸嬢は日々黄金的の業を爲す而已ならず、黄金よりも珍貴堅牢なる金剛石的の業を爲されん事、是れ我の希望する所なり云々』。

(十八)

余の以上記述し來りし所は、冠するに歴史の名目を以てすべきものにあらず、單だ黒衣婦人とは何ぞやと云ふ尋問に對する事實的證明、歴史的答案として見る可きのみ、然れども今後黒衣婦人の何物たるかは、幾分か世に知らるゝに至らん、同婦人の熱誠と丹心とは、我日本に於ても貫徹して、泰西に於けると同じく成功するに至るや否やは、固より將來の問題なれども、歲月と試験とあらむ、貫徹成功せずと云ふ理は萬々之なかるべき歟、快活なる此木、液汁津々たる此木は、到る處に美花好果を奏したりと云ふ、然らむ獨り我豊葦原の秋津洲に植ゑられて發育よろしからずと謂ふ可けん

や、然れども余は先づ是が爲には讀者と共に同木の我風土に慣れんことを望まざるべからず。

黒衣婦人 畢

明治三十年十二月二十日印刷
明治三十年十二月廿五日發行

編者 前田長太
東京市京橋區新築町六丁目卅五番地

發行者 石川音次郎
東京市京橋區木挽町一丁目十四番地

發兌元 文海堂
東京市京橋區銀坐三丁目十五番地

印刷者 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

印刷所 國光社印刷所
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

新版廣告

佛人リギョール氏著

古事新論 全

正價八錢
郵稅二錢

事跡以前以後之歷史 全

正價三十錢
郵稅六錢

哲學論綱 全

正價二十五錢
郵稅四錢

國家盛衰之原理 全

正價八錢
郵稅二錢

A-54

照
闇
之
燈
全

希
露
離
教
論
全

處
世
哲
學
全

愛
國
の
眞
理
全
再
版

ト
ラ
ピ
ス
ト
全

發
兌
元

東京々橋區銀座
三丁目十五番地

正 價 十 錢
郵 稅 二 錢

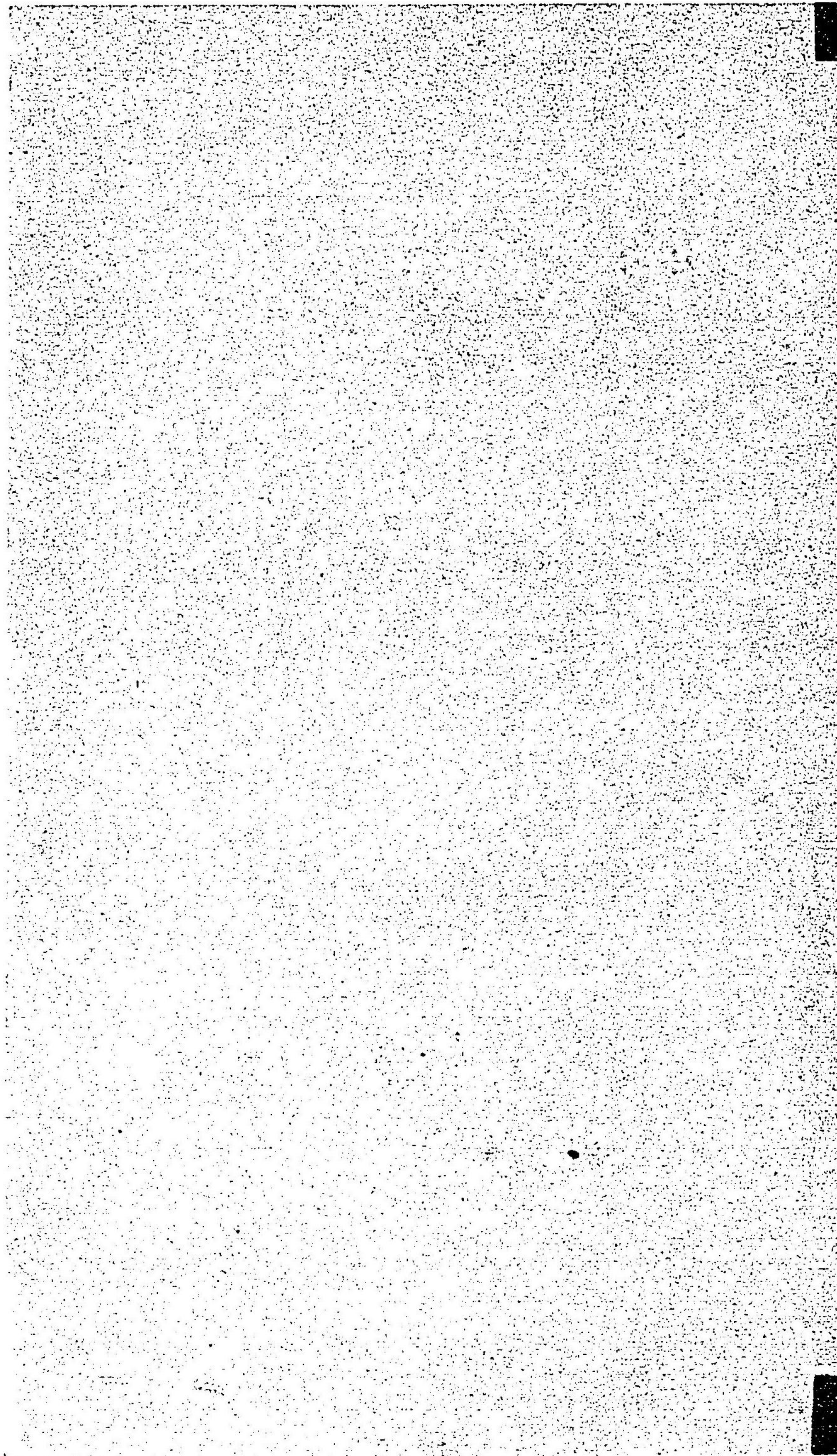
正 價 十 五 錢
郵 稅 四 錢

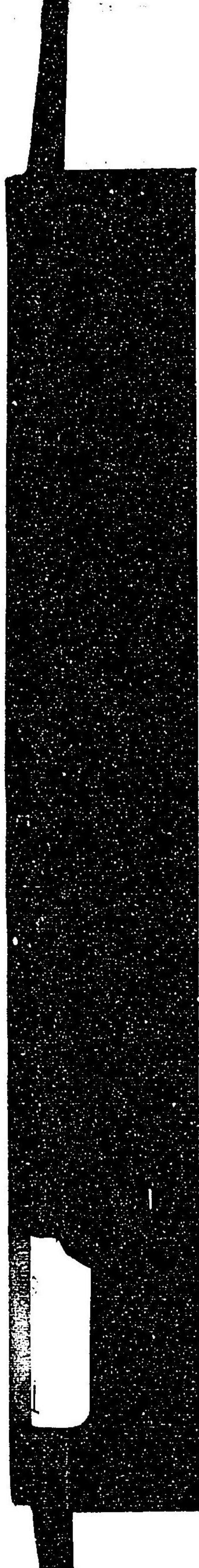
正 價 二 十 二 錢
郵 稅 四 錢

正 價 十 錢
郵 稅 二 錢

正 價 八 錢
郵 稅 二 錢

文
海
堂





黒衣婦人

前田長太

国立国会図書館

020636-000-0

特49-101

黒衣婦人

前田 長太/編

M30

ABI-0452



